

# 序 文

医療はその進歩・発展と専門性の進行に伴い、医師、看護師、その他多くのメディカル職種のコラボレーションが必須となってきました。特に小児医療では、チームを組むメンバー全員の協力が医療の質を決定するまでになっています。質の高いチーム医療を提供するためには、小児の医療に携わる全員が小児の生理学的特性、小児の病態生理、小児疾患に関して共通した基礎的知識を持っている必要があります。

本書は小児医療の現場において、小児医療に関係する各職種の方々に「これだけは知っていてほしい」と考えられる小児科学の要点をまとめたものです。この目的から、執筆者としては現在、看護学科、保健学科、保健福祉学科などで教鞭をとっておられる小児科医を中心とし、この他に現在、小児医療の現場で活躍されながら上記各学科で非常勤講師などの立場で教えておられる方々にお願いしました。

本書ははじめ看護師、助産師、各種メディカル職種を目指している大学生を対象とした教科書として企画されましたが、上述の編集方針で執筆していただいたので小児専門看護師を目指す大学院生、さらには現に小児医療の現場におられる看護師、保健師、助産師、その他のメディカルの方々の参考書としても十分に対応できる内容になりました。

内容としては、看護師などの国家試験に出題された事項・疾病は当然のことながら網羅され、通常の大きさの字で記述されています。さらに高度な「知っておいてほしい」事項や疾病は参考事項として一段小さい字で記述してあります。全体をわかりやすいように2色刷りとし、重点項目を色刷りとしました。

前述の目的に沿うために、本書では系統別に個々の疾患について症状、診断、治療という記載方法ではなく、ある程度グループ化した疾患群について、それらの疾患がなぜ起こり、なぜそのような症状を呈するのかといった「病態生理」をベースとした解説の仕方を心がけました。

全体を通して、項目立てはできるだけ細かくしましたが、それぞれについての解説はなるべく簡潔にまとめてあります。

用語は日本小児科学会編「小児科用語集」に準拠してあり、医学用語、看護用語で読み誤りしがちなものには、読み仮名(ルビ)をふってあります。また臨床現場でしばしば使われる英語は医学看護用語の直後に併記しました。

以上のごとく、本書は「小児科学」という表題ですが、医師対象の書にあるような検査、治療の項目は必要最小限とし、あくまでも小児の生理と病態を理解して、小児医療、ケアに当たることができるような構成となっています。看護、リハビリ、福祉関

係の学生諸君はもちろんのこと、現に小児医療にあたっておられる看護師，その他の職種の方々に活用していただき，より良い小児医療の実現に役立つことを期待しております。

2006年3月

聖路加看護大学大学院教授 白木和夫  
神戸大学大学院保健学研究科教授 高田 哲

本書の初版が2006年に刊行されてから今日まで12年が経過しましたが，お陰様で看護・医療関連各職種の教育機関で広く採用されてきて，今回の改訂第6版を刊行するに至りました。前版では，それまで項目のなかった皮膚疾患，耳鼻咽喉疾患，眼疾患，整形外科的疾患，歯・口腔疾患を関連領域として新設するなど，かなり大幅な改訂を行いました。今回は一部執筆者が交代したほか，統計などはできるだけ新しいものに差し替え，内容もできる限り最近の知見に従って改訂しました。また，読者からのアンケートを参考として，やや煩雑となっていた文中の重点項目の色刷りをやめて太字にするなど，読みやすくなるよう努めました。

初版の序文でも述べたように小児医療はもともと医師，ナース，その他多くのメディカル職種の協働なくしては成り立たない医療ですが，近年の医学，医療の進歩・発達，複雑化により，関連各職種協働の重要性が更に増してきています。医師以外の職種では各種疾患の病態生理，診断，経過，予後に関する知識はあまり必要ないのではと考えるかもしれませんが，ナースなど頻繁に患児に接する方々の観察から得られた病状の僅かな変化が，時に診断の手がかりや治療の変更を必要とする有力な情報となります。医療に携わるすべての方々判断力が，その病児の予後を左右する事態となることも稀ではありません。本書に記載された小児科学の知識を，そのような観察の基礎として体得しておいていただきたいと思います。そしてそれをベースとして個々の事例に関してはそれぞれ専門書を参照して知識を深めていただければと思います。そうした日常の勉強，努力が医療者としての能力を高めていくものと考えています。

本書が看護基礎教育における小児看護実践能力の向上に寄与するのみならず，小児専門看護師養成や各分野の医療職の小児診療能力向上のお役にも立てることを願っております。

2018年3月

鳥取大学名誉教授・聖路加看護大学元特任教授 白木和夫  
神戸大学大学院保健学研究科教授 高田 哲